

明治期の京都高等工芸学校生徒作品 —「纏う図案」—近代京都と染織図案 I」出品作品から

美術工芸資料館では、9月25日から11月2日まで「纏う図案—近代京都と染織図案 I」を開催している。本展は明治から大正前期の染織図案をテーマとして、生産現場と教育の両側面から紹介するもので、当時描かれた染織図案を中心に展示している。

京都は明治の東京遷都からの復興を目指し、明治3年(1870)には理化学研究の拠点である舎密局を設立し、染織分野では、織殿(明治7年(1874))と舎密局の所管機関である染殿(明治8年(1875))をそれぞれ開設するなど、在来産業の近代化を推進していた。また、染色技術の改良と普及を目的とした伝習施設として、京都染工講習所が明治19年に開所(明治27年にこれを母体として京都市染織学校を設立)している¹⁾。

技術改良を中心として産業の近代化を進めるなか、製品の改良は「図案」とその開発を担う人材の育成へと繋がる。京都ではじめに「図案」を教育する機関として設立されたのが、明治13年(1880)に創立された京都府画学校である。画学校はその後、明治22年(1889)に京都市に移管されて京都市立美術工芸学校となる。画学校は、新人画家の育成を目的とした教育機関で、「工芸図案科」として図案教育が開始されたのは明治24年(1891)のことで、京都府画学校時代の明治21年(1888)に設置されていた応用画学科を継承するかたちであった。

京都高等工芸学校が設立されたのは、さらにその後の明治35年(1902)で、色染科、機織科、図案科の3科での出発だった。開学の初年度、入学者を募集したところ、色染科は志望者が定員を超過したため、選抜試験を実施したという記録²⁾が残っており、特に期待が寄せられていたことがうかがえる。設立以前には地元から官立学校設立の請願運動が起こっていたが、この運動も染業者を中心としていた³⁾。染色分野では、すでに技術伝習のための京都染工講習所(明治35年時点では、京都市染織学校)、絵画教育を基盤とした美術工芸学校があったが、さらにもうひとつ学校を設立してほしい、しかも官立の学校を、という声が産業界から起こっていたということになる。設立の契機は、地元産業界からの要望もあるが、それだけではなく、同時期に国内で盛んになった実業教育の拡充という側面もある。日清戦争後の産業成長によって日本は軽工業から重科学工業に移行しつつあり、科学的な技術知識に関する教育の振興がおこり、地方に工業、農業、商業に関する実業学校が設立されていった。明治31年(1898)には議会で高等教育機関増設の案が貴族院から政府に

建議され、これが決定された。地元産業界からの要望と政府の実業教育の充実という目的が合致するというかたちで、高等工芸学校は、明治32年(1899)の実業学校令に準拠する「工業学校」として明治33年(1900)に設立が計画された。設立の準備段階では、「工芸学校」ではなく、東京、大阪に次ぐ「第三高等工業学校」という名称がつけられていたが、開校のときに「設置する学科ハ凡テ美術工芸ノ実業ニ関スル」という京都の地域性と学科構成を反映したことを理由に「工芸」に変更されたのである。

明治期の図案科では、「図案学及実習」という科目の「装飾計画」で図案制作の実技的な指導がおこなわれていた。本展で出品している開校初期の生徒による作品は、この「装飾計画」で制作された課題作品で、二年生の前期と後期に実施されていた染織関係の課題を中心に紹介している。図案科では、入学してから一年間は水彩や鉛筆、木炭による植物、人物などのスケッチが中心的な課題で、絵を描く基礎的な技術を習得することが重視されていた。「装飾計画」はその応用的な内容であり、具体的な製品を想定したテーマが与えられていた。課題のなかで染織関係の製品を想定したものは、二年生の前期課題の「縞及格子模様新案」、後期の課題の「りぼん新案」、「机掛又ハ座蒲団模様新案」、「友仙又はハ壁張新案」、「帯地新案」、「裾模様」がある。

明治44年(1911)に制作された《婦人帯地模様図案》(AN.3659-43)は、孔雀と思われる鳥を抽象化した連続模様として図案化した作品である。三角形を放射状にして羽に見立てた部分は、退色しているが部分的に金が残っており、金糸による刺繍を想定していた可能性がある。タイトル下部に記載されているように「原寸図」とされたこの図案は、およそ高さ33.8cm、幅22.7cmで描かれており、長辺が帯の幅となる。同じく帯地の課題で明治45年(1912)に制作された《婦人帯地新案》(AN.3660-17)は、植物の葉と霞を合わせたような模様の背後に扇や小槌などの吉祥文様のモチーフが見え隠れする図案である。同じく高さ30cm幅20cm程度の原寸で描かれている。

明治44年(1911)に制作された《裾模様練習》(AN.3659-38)は、百合の花をモチーフにしたもので、地色と同系色で彩色された葉や茎とは対照的な真っ白な花が印象的な作品である。2分の1の縮尺で描かれた図案とともに原寸の部分図が線画で添えられている。これらの染織系の製品を想定したものは、他に平面的な課題でいえば、壁紙やテーブルクロスなどがあったが、壁紙

徒作品 織図案 I」出品作品から



梶田郁《婦人帯地模様新案》
明治44年(1911)AN.3659-43



東山静《婦人帯地図案》
明治44年(1911)AN.3660-17

やテーブルクロスにも同じく原寸の表記があるものが多くみられ、実際の製品を意識していたことがわかる。

課題はこれまで紹介した帯や裾模様など染織品を想定したものから徐々に陶磁器や家具などの立体物へと展開し、最終的には室内装飾という建築空間のデザインとなる。教育課程の最終目標が建築に設定されている点は、図案科の初代教授のひとりが建築家の武田五一であったことが原因であろう。しかし、染織産業は京都の伝統的な産業であり、当時の主要産業でもあった。先に触れたように学校設立に関しても産業界からの要望があったことを考えると、今後も、京都高等工芸学校の教育と染織産業界との関係については、引き続き検討する必要がある。

(美術工芸資料館 技術補佐員 岡達也)

註

- 1 並木誠士、青木美保子編『京都近代美術工芸のネットワーク』pp.30-31、思文閣出版、2017年
- 2 京都高等工芸学校「京都高等工芸学校一覧 自明治三十六年至三十七年」、1903年
- 3 宮島久雄『関西モダンデザイン前史』pp.33-34、中央公論美術出版、2003年



池上年《裾模様練習》
明治44年(1911)AN.3659-38